
第 1 章

閉会にあたって

早稲田大学心理学会は66年の歴史を刻んできた。

早稲田大学文学部哲学科心理学専修は1932年に創設され、22年後、早稲田大学心理学会が設立された。学会成立の背景を歴史的経緯から辿ってみる。

文学部哲学科心理学専修創設の周辺

早稲田大学文学部哲学科心理学専修の創設は1932年（昭和7）、国内の大学ではやや遅い創設であった。

大学では、東京帝国大学出身で実験心理学者であった中島泰蔵（1867-1919）が文学部講師として「実験心理学」を講じた（1910）。恩賜館心理学実験室（現7号館）が設置され（1918）、実験器具が多く置かれた。中島は実験室設置に大いに関与した人物として記録されている。早稲田大学文学部文学科第1回卒業生である金子馬治（1870-1937）は哲学、心理学、美学を講じ、「普通心理学」(1917)を著している。坪内逍遙（1859-1935）も心理学の講義を受け持っていた（当時の試験問題が残っている）。このように大学内では心理学の講義が古くから行われていた。

赤松保羅（1891～1980）は、大正6年（1917）から10年（1921）にかけ、アメリカのコルゲート大学とコロンビア大学（哲学及び心理学研究）に留学し、ヨーロッパ5か国（英・仏・独・伊・スペイン）の教育視察をしてから帰国している。帰国後しばらくして、中心に非常勤講師の内田勇三郎（1894-1966）と専任の戸川行男（1903-1992）を迎えて文学部哲学科心理学専修を創設した（1932／昭和7年）。非常勤講師に多くの帝国大学出身者がいる。大学の心理学科創設としては後発組であった。基本的な心理学実験や心理学史、哲学関連の科目を揃えているが、内田を中心にして臨床心理学（臨床に関わる実験的研究や測定研究、薬物実験等）に特色を出す体制でもあった。内田が行っていた連続加算作業（通称クレペリン作業検査）の経過観察から定型曲線・非定型曲線が導出され、呼吸研究、疲労研究、薬物を用いた研究（メスカリン、アンフェタミン等）が行われた。後に「臨床の早稲田」と言われる道筋をつくった背景である。1935年の第1回卒業生は3名であった。

1941文卒の本明寛（1918-2012）のロールシャッハ・テストの研究や1942文卒の三島二郎（1919-2008）の精神テンポの実験的研究は、この臨床系の流れに沿って拡張された優れた研究であった。

早稲田大学心理学会の設立と再発足

1948年に「学生心理学会」が心理学専修内で開催されている。詳細は不明である。

1949年の新制大学への移行に伴い第一文学部と第二文学部が設置され、両学部共心理

学専修が置かれた。第二次大戦後は、旧制と新制の中学・高等学校等の卒業生が混在し、勉学の機会を求めて第一・第二文学部の心理学専修に進学し、多くの人材が巣立っていった。

1952年、「臨床心理学研究会」(戸川行男会長)が発足し、17年後の1969年に解散している。その間、1954年(昭和29)に「早稲田大学心理学会」が創設された。赤松、戸川、本明、三島他の教授陣が中心になり、社会で活躍する初期の卒業生らが参画して創設されたものである。

心理学教室の実験室や在野での実験的臨床研究の成果が積み上げられ、卒業生(教育機関、国家公務員、企業等々)との情報交換や旧交を温める場として学会は設立された。

1960年代半ば以降に起こった学内事情により早稲田大学心理学会の活動は1966年の第7回大会で中断された。1966年入学者から適用された学制改革(2-2制)と同時に学費値上げに対する学生抗議運動がおこった(1965年暮れ頃から)。学費値上げ反対運動は1966年に入って激しくなり、学生運動は次第にセクト化していく契機にもなった。その運動の激化により1966年入学者(1970年卒)の卒業確定日は年度末ぎりぎりの3月31日になる、といった事情が続いた。学生運動が次第に沈静化していくのに10年近くかかっている。

心理学専修創設者である赤松保羅は1962年に定年を迎え、指定寄附を行っている。同年は心理学専修創立30周年を迎えるが、学内事情から1967年に祝いがあった。同年、旧体育局の校庭の端に有った通称音楽長屋の隣りに鉄筋コンクリート造りで3階の建物ができる。以前から心理学教室が要望していた実験室が実現し、心理学測定室・実験室・遊戯室等が2-3階に割り当てられた(旧36号館)。早稲田大学心理学会は寄付金を出している。

1966年入学者から新制度(専門課程進級が3年生:1965年以前入学者は1年生から心理学専修)に移行したが、それまで哲学科の機関紙『フィロソフィア』に投稿していた心理学教員は、新制度で発足した「早稲田大学文学部心理学会」の機関誌『早稲田心理学年報』に軸足を移し、1969年2月に年報第1巻が刊行された。

早稲田大学心理学会と早稲田大学文学部心理学会の補完的關係

早稲田大学心理学会と早稲田大学文学部心理学会(1968年発足)の二人三脚が始まる。このことでお互いが補完的になる一方、両者の関係が曖昧になり、混乱をもたらす原因にもなった。年報は学術論文を掲載するものである。一方、早稲田大学心理学会には学術誌を掲載する機関誌を持っていなかった。そこで両者は相乗りの形になったのであろう。年報は、早稲田大学心理学会会員や会員でないが研究者である卒業生にも実質開放されていた。早稲田大学文学部心理学会には学会にふさわしい活動は事実上なかったため、それを埋める役割が早稲田大学心理学会にはあったと言える。

1977年5月1日に情報誌である早稲田大学心理学会機関誌『早稲田大学心理学会会

報』の第1号が発刊された。

文学部心理学会は、学生の納付金に含まれる学会費と学部からの出版補助金とで早稲田心理学年報を発刊している。年報は、教員、大学院生、卒業生による投稿論文や依頼論文等により構成される。年報の奥付には会員頒布「一部1,000円」とあるが心理の学生・院生には無料配布される。会員頒布は、早稲田大学心理学会会員を念頭に置いているようで、発行される都度会員に送られた。後年、年報を会員に自動的に送付することから、希望者への送付となった。会員でなくても購読したい向きにも購入可能であった。なお年報への寄稿・投稿は、早稲田大学心理学会会員や関係者が単独・連名で可能であった。心理学教室主導で、教員の持ち回りで編集者が指名され、誌面作りを行っていた。

このような経緯と卒業生との情報伝達・交流の意義から、第一・二文学部心理学専修と教育学部教育心理学専修の卒業生名簿が作られ早稲田大学心理学会会員にはアスタリスク（*）が付けられていた。その作成には学会の財政的負担も大きかった。1995年版を最後に卒業生名簿は作られることはなかった。2000年代に入って早稲田大学心理学会会員名簿のみ作成されている。

外的環境と学会活動の関係

1976年、早稲田大学心理学会が再出発する（第1回大会）。文学部と教育学部の教室教員の総力で設立している。その中でも清原健司を中心にして学会は再組織化され会則も整備された。しかし清原は第2回大会開催を待たずに急逝された。

1977年の第2回年次大会総会で役員人事が決まり、翌年から個人会員3,000円、賛助会員30,000円の会費徴収案が承認された。会則変更の承認、1981年に予定される教室50周年記念のための諸行事についても取り決めている。この時の事務局は、文学部・教育学部・体育局・生産研究所（後のシステム科学研究所）に所属する専任教員5名であった。この大会の参会者は、懇親会出席者を含め235名であったと記されている。

1981年に第5回年次大会が「心理学の将来」のタイトルで開催され、教室の重鎮ばかりでなく各地で活躍する卒業生の話題提供が続いた。夕刻から、大隈小講堂にて早稲田大学心理学教室50周年記念式典が行われた。この時の剰余金の一部と寄附金とで「早稲田大学心理学研究基金」が設定された。早稲田大学心理学会も研究資金審議会のメンバーであるが、実質的には心理学教室教員の審議にゆだねられた。

1983年、日本心理学会第47回大会を早稲田大学が引き受けている（大会長 本明寛）。

学会運営に大いに寄与し、学会運営の中心にあった浅井邦二、相馬一郎、春木豊の3文学部教員は1987年の人間科学部開校により転属した（浅井学部長）。

1989年、本明寛は退職し、日本健康心理学会の設立と運営に重きを置くようになる。

頒布価格表示があるのは1995年3月発刊の早稲田心理学年報第27巻までであり、1996

年の第28巻以降は表示がなくなっている。この頃になると、早稲田大学心理学会の会費徴収と年報の頒布価格との混同や混乱が起こっていたかもしれない。心理学教員の意識には会員を除いて、早稲田大学心理学会と文学部心理学会の区別がつかなくなってきた。

論文や特集を組んでいた年報は、2001年3月発刊から「卒論・修論」の要約集になったのである。このような状況下、早稲田大学心理学会との異同が分からない学部生・院生にとっては、当学会入会は選択肢にないものであろう。卒業式の折に当学会入会の宣伝はしていた。

時代の流れに応じて

早稲田大学心理学会の年次大会は、初期から1997年の第22回大会頃までは、講演会、シンポジウム、部会シンポジウム、パネルディスカッション等を程よく組み合わせた、いわば盛沢山な大会が開催されてきた。

一方、学会内の研究部会活動は本明寛の退職前後から開始されている。活動は以下の通りである。

臨床心理学研究部会は1983年に活動を開始し1997年まで活動している（53回）。

1985年には意識心理学研究部会（～1997年／26回）と非行心理研究部会（～1997年／31回）が発足し活動した。

生理心理学精神生理学研究部会は、臨床心理研究部会と同じころ発足したと思われるが記録がない（山崎勝男、宮下彰夫の指導）。1988年からは主に人間科学部（山崎勝男）で開催された（～2017年／71回）。

障害児教育研究部会は1993年から2007年の間に39回の研究会を開催し、後半は武藤直子が行われていた。

発達臨床研究部会は1995年から1997年を活動期間に13回の研究会を開催した。主に小嶋謙四郎の話が中心であった。

マスコミ研究部会は1995年から2001年まで79回開催している。期間は短ったが研究会の頻度が多かった。

老年学研究部会は、2002年から2018年まで都合73回、谷口幸一を中心に所正文と二人で精力的に進めた研究部会であった。

これらの研究部会はそれぞれの研究部会でテーマを検討してきたが、2000年頃までの年次大会には部会シンポジウムとして組み込まれ、参加者は自由にテーマを選択することができた。

1996年から2000年までの年次大会には、ポスター発表をも取り入れている。大学院生、卒業生、あるいは大学院ゼミからの報告であった。盛んなコミュニケーションを標榜した木村裕会長の試みであった。

2007年から、新たに教養講座を立ち上げている。心理学領域で著名な専門家を招聘

し、話題提供してもらい、質疑応答するものである。学内に立て看板を置いた。早稲田大学の学生、院生、一般市民が自由に参加できる形式である。途中2回の特別セミナーの開催を含め、教養講座は2018年まで続けられた。瓦版に要旨を載せて会員に配布している。

早稲田大学心理学会の歴史を周囲の事と合わせて辿ってきたが拾いきれない事柄は多い。しかし学会の歩みの概要は見えてきたかと思う。

2001年以降の年次大会は、公開講演会かパネルディスカッションのいずれかで開催されるようになった。心理学領域に限らない著名な人を招聘し、いずれも盛会であった。

第2節 | 年次大会を振り返って

—盛んなコミュニケーションをめざして— 木村 裕(一文・1965)

私は1994年に、早稲田大学心理学会の会長役をお引き受けすることになりました。就任に際しまして、役目上のテーマとして、或いは、自分に向けた課題として、一つの達成目標を設定しました。それは、先輩と後輩の交流、また、同級生同士の交流、を意識した『盛んなコミュニケーション』の促進ということでした。

それまでは交流が無かったのかと言うと、そんなことは無いのですが、例えば、大会では壇上での偉い先生方のシンポジウムや講演などが中心になっていて、若者たちを巻き込んだ交流とは少し違っていたかに思われました。沢山の先輩方が各方面で活躍して居られるのだから、現役学生との間にもっともっと盛んに刺激的な交流があれば、時間はかかるかも知れませんがきっと好ましい展開があるのではないかと考えました。同世代間の情報交換も、専門（卒論や修論のテーマ）の違いを超えてさらに高頻度に、行われた方が良くない、と考えました。早稲田大学心理学会という名称を意識しながら、当時、私は学生達の事を真ん中に据えて考えておりました。

もうひとつ早稲田大学文学部心理学会と言うのが有りまして、これは学生が大学に納める学会費を基盤にしておりまして、心理学教室が運営する学生のための学会でした。早稲田心理学年報という機関誌を毎年刊行しておりました。学部生、修士・博士課程の大学院生が主要な投稿者でしたが、学生に様々な分野の最前線の研究・実践の事情を知ってもらうという趣旨から、学部生・大学院生ばかりではなく、企業、研究機関、クリニック、相談室などの最前線で活躍する心理学教室出身の卒業生にも依頼して、論文や報告を掲載させてもらっておりました。

早稲田大学心理学会の、年に1度の大会でも、さまざまな関心を持つ学生の要望に少

しでも応えようという発想のもとに、学部生・大学院生にも呼びかけながら、ポスター発表や多数のシンポジウムなどを準備して参加してもらいました。時には、国外の大学から研究を展示してくれた留学生も居りました。

また、大会の行事や催しが終わった後には、引き続き心理学専修出身者皆様が、職種ごとにいくつかのグループを形成して、学生の進路相談に対応して下さったりもしました。

このような様子は、早稲田大学文学部心理学会と早稲田大学心理学会とが、別組織でありながらも、具体的な活動の現実場面においては、一体化したかに感じられる様子でありました。目標とした『盛んなコミュニケーション』に、一步近づいたかと思われました。

数年に渡ってこの状態は繰り返されましたが、大会の企画運営についやす時間、人手・労力、費用、会場の設定、などの事や、報告・発表への見返り（研究業績としての評価の水準）などの事に深刻な関心が向けられるようになりまして、徐々に大会への参加者は減少し、発表報告の数も減りました。卒業生が当学会に入会することも無くなりました。

その後は、大会の方針も現実的な要請に応じて少し変わりました。当初考えられたコミュニケーションの有り方も異なる様子を示すようになったと思います。企画内容は、教室出身者という事にこだわることなく、著名な先生にお願いする年に1度の講演会と、最前線で活躍する先生方によるワークショップなどを中心にした年に2回の教養講座、を開催するというふうに着いてきました。多くの方々が関心を向けている今日的なテーマを取り上げるこのやり方は、特に2011年に会長役を石井康智先生に代替わりして以降、講演会も教養講座も、いつも沢山の出席者があり、素晴らしい成果をあげてまいりました。

最初に目指した『盛んなコミュニケーション』は、現在のように、スマートフォンやコンピュータを、どこに居ても自由に操作できるようになる以前の古風な発想に基づいて居ります。コミュニケーションが大切なことは今も昔も変わらないと思いますが、そのあり方はかなり大きく様子を変えることになりそうです。

早稲田大学心理学会は閉会となりますが、新しい時代の新しい方法で、心理学教室出身者の間に、『盛んなコミュニケーション』が、さらに広く深く賦活維持されることを期待しております。

1. 障害児教育研究部会の思い出

親子相談センター所長 武藤直子（一文・63卒）

研究部会の報告をするには、余りにも資料がなくわずかな記憶だけでお伝えしなければならぬことをお詫びいたします。歴代の会員名簿や記録が行方不明になってしまっているのです。

早稲田大学では、戸川行男教授が「特異児童」(1940年刊)の本の中で山下清のことを書かれているそうですが、日本の自閉症の第1症例が報告されるよりも12年も前のことですし、教育学部に移られた三島二郎教授が「障害児」の発達助成の原理というご自分の見地を述べられているなど、障害児に対する研究や理論化がなされている伝統がありました。

三島教授の研究室で卒業生有志に「障害児」の教育心理学を講義してくださっていたそうです。早大心理学会の第2回年次大会（1977年10月23日）の部会シンポジウムの一つ、シンポジウムA「心身障害の教育」が大学院の阿部健一氏が司会を務め、話題提供者として横田滋氏（調布中学特殊学級）、三谷嘉明氏（あけぼの学園）、山田孝氏（リハビリ学園）が登壇されていました。たぶん学会再出発の頃から研究部会が始まっていたのではないかと思います。

私が参加し始めたのはすでに6、7年経ってからではないかと思います。横田滋氏（当時障害をもつ子どものグループ連絡会）、大見川正治氏（文京短期大学、後旭出養護学校長）が中心となって運営されていました。私は大学在学中ほとんど障害児のことを勉強せず、経験せず卒業してしまいましたが、その後職場の仕事を通して自閉症のセラピストとして障害児の豊かで興味のない世界に入っていくことになりました。一時東京都の民生局判定員や、結婚後都区内の教育相談センターに初めての非常勤心理職員、新潟でのボランティア専門職として幼児の障害児療育などを経て早稲田大学のすぐ近くの職場で自閉症児の集団療育を行っていました。研究会を知ったのはその時期でした。自閉症については、「謎」とも言われ、TVを見せているせいで自閉症になる、という見地がマスコミで大きく取り上げられたりしました。自閉症を情緒の問題であるとし、まだ脳の機能障害によるという見方が定着していませんでした。しっかりした療育の在り方が確立されていなかった時代です。その中で私は、東大病院精神神経科小児部の太田医師を中心としたデイケアの人たちと「太田ステージ」という簡便に発達を評価した上での「認知発達治療」をまとめている頃でした。

研究会では先輩の方々のお話にとっても刺激を受けました。しばらくして私が事務連絡係を仰せつかり、卒業生名簿を見て関係ありそうな方々に案内を送ったりして年3、4

回ずつの集まりを続けました。心理学を専攻した仲間とはいえ、多職種でそこからの刺激はとても貴重でした。障害児教育教員・高校教諭、大学で教えている人、病院関係の職種、私のような自閉症専門セラピスト、施設職員、公務員の方々、学校経営者、療育専門機関、見相（ゲシュタルトセラピーの人）等々。会員の職場の話や研究なされているテーマについてのお話、時には外部の先生を講師としてお呼びし貴重なお話を伺ったこともあります。熱い語らいが夜遅くまで行われる熱気ある場で大いに勉強させてもらいました。

私にとって印象に残っているいくつかの研究部会には：愛知県コロニーの初期に心理職として途方にくれながら障害児の療育を工夫されたお話やゲシュタルト療法の自己への気付き体験、発達障害児の親の障害認知について、その他難聴児の早期治療の話、視覚障害者のコミュニケーション、「施設に感動はあるのか」というテーマで施設長さんのお話、県立商業高校の障害児受け入れ、「カオスから自閉症を考える—脳科学的自閉症論」(外部講師) など様々なテーマがありました。

この原稿を書くにあたって何人かの方に当時のことを聞いてみましたが、研究会後飲みながらのおしゃべりがとても楽しかったという一致した感想でした。

この研究部会から外部に発信することはなかったのですが、早大心理学会からの支えで沢山の出会いと学びがありましたことを感謝いたします。

2. 臨床心理学研究部会の活動を振り返って

桜美林大学 河合美子（一文・1979）

1. 活動の始まり

臨床心理学研究会は、80年代の初め、研究部会の中では早くから活発な活動を開始し、武藤直子先生、望月稔先生、矢田部多賀子先生など、たいてい十数名の卒業生の方が参加されていました。私は、博士後期課程でご指導いただいた富田正利先生が本研究会の世話人をされていたこともあり、開催の連絡（当時は葉書）や当日の受付等をお手伝いするようになりました。当時は、臨床に関心のある大学院生が数名お手伝いをし、会費は免除で毎回先生方のお話をお聴きすることができました。研究会の世話人は富田先生の後、深澤道子先生に引き継がれ、私は大学院修了後も、勤務した専門学校が早稲田にあったこともあり、90年代後半まで10年余り事務局のお手伝いを続けていました。

2. 多様な領域からの話題提供

改めて開催の記録を見ると、臨床心理学に関連して、きわめて広範囲のテーマが取り上げられていたことがわかります。精神病理や心理検査、心理療法の話題もあれば、働く人のメンタルヘルスや非行の問題、児童相談所や婦人相談所での実践を伺うこともあ

りました。交流分析（TA）の深澤道子先生による「心配性の人のためのワークショップ」、老年心理学の井上勝也先生のお話など、印象に残る回が多くあります。当時東京都老人総合研究所にいらした福澤一吉先生は、数回にわたり、失語症など言語に関する神経心理学的研究をご紹介くださいました。

早稲田の心理学出身の先生方が多方面で活躍されていたのに加え、先生方の広い人脈により、大野裕先生（「認知療法」）、北山修先生（「言葉と精神療法」）など、他大学からも多様なアプローチの臨床家が毎回おいでくださいました。福祉分野では、「ノーマライゼーション」を小野顕先生がご紹介くださり、精神障害者の地域生活支援の草分けともいえる「やどかりの里」の谷中輝雄先生のお話も伺うことができました。

1995年の阪神淡路大震災の後には、年次大会の中で研究会として、被災した人の心理をテーマとしたシンポジウムを開催しました。本研究会は、臨床心理学に関わるその時々テーマを取り上げるとともに、活躍される臨床家・研究者に接する貴重な場だったといえましょう。

3. 交流の機会

金曜の夜9時に研究会が終わると、毎回、小野顕先生が「じゃあ、行きましょうか」と講師を囲んでの食事の席に、私たちスタッフの大学院生もお誘いくださいました。気さくにお話くださる先生方のお人柄にもふれる機会をいただいたのは、何と貴重だったことかと思ひ返し、感謝を新たにしています。

ご参加の先生方から、学生時代の心理学教室や当時の先生方のお話を伺うこともありました。当時は既に名誉教授になっておられた戸川行男先生のかつてのご研究のお話を伺うなど、早大心理学教室の臨床心理学研究の歴史の一端を知る機会にもなりました。

なお、私事ですが、研究会を手伝っていた大学院生の中に、夫の千葉浩彦（一文・1983）もおり、結婚の際、小野先生ご夫妻にご媒酌をお願いしました。今、私は大学で福祉と心理の両方に関わって教育を行う中で、小野先生から折に触れ福祉領域での豊かなご経験からのお話を伺えたことも、ありがたく思っています。

4. 研究会活動のその後

臨床心理学の分野では、1988年に臨床心理士の資格ができ、学会や臨床心理士会等での研修会等も活発に開催されるようになりました。その間に、卒業生の集まりである本研究会は次第に開催が減り、学内の先生や大学院生の関与も少なくなって、活動の引継ぎも難しくなっていくように思います。

90年代の終わりには、事実上研究会活動は休止となり、その後、他の部会と合同での企画が提案されたこともありましたが、実現しないままになったのが心残りです。

このたび記念誌制作にあたって、研究会の開催記録をなつかしく拝見しました。既に故人となられた先生方のお名前も多く、かつて先生方から学んだことを、今関わる学生

達に少しでも伝えていきたいと考えています。

3. 生理心理学精神生理学研究部会活動を振り返って

市原 信 (一文・1973)

早稲田大学生理心理学精神生理学研究部会は、新美良純先生、山崎勝男先生、宮下彰夫先生らを中心に1980年代に設立されました。研究部会の開催は夏と冬の2回程度を原則としてきました。

研究部会のメンバーは早稲田大学心理学教室の皆さんが中心ですが、それ以外にも生理心理学関係の研究機関や大学にも視野を広げ、国内のみならず海外の研究者の方にも参加していただきました。

研究部会としての主たるテーマは、睡眠、自律神経系、脳波などが中心ですが、関連分野も含め幅広い話題提供がなされてきました。

以下に、2017年8月から2001年10月までに論議された研究発表の演題を列記します。

第71回研究会：生理心理学研究を目指す皆さんへ一気づくこと、何とかすること、気を付けること、第70回研究会：運動学習とパフォーマンスモニタリング機能の関係、視線行動に着目したアスリートのあがり防止の研究、第69回研究会：モンティ・ホール・ジレンマ課題における予期プロセス—刺激前陰性電位に着目して—、第68回研究会：日常的なポジティブイベントの継続的筆記が楽観性と悲観性に及ぼす効果、第67回研究会：深夜の仮眠がエラーモニタリング機能（ERN・Peの振幅）に与える影響（The effects of a nighttime nap on the error-monitoring functions during extended wakefulness）、第66回研究会：若年者と比較した中高年者の運動反応と前期・後期CNV（The motor reaction and the early and late CNV in the middle-aged compared with those in the young）、第65回研究会：Effects of Response Complexity and Movement Duration on the Lateralized Readiness Potential、第63回研究会：運動学習における文脈干渉効果とERP、第62回研究会：「行為と結果の随伴性と事象関連電位」、第61回研究会：視覚運動学習における睡眠の効果、第60回研究会：レム睡眠中の脳機能研究～ヒトとラットを対象とした夢の発生メカニズム検討～、第59回研究会：身体運動は認知機能を改善する？、第58回研究会：CNVパラダイムに反映するタイミング、第57回研究会：「眠気とエラー反応モニタリング」、第56回研究会：レム睡眠中の急速眼球運動に伴う脳電位と夢見の精神生理学的検討、第55回研究会：「注意の集中は呼吸運動を抑制する」、第54回研究会：Movement preparation (lateralized readiness potential: LRP)、URL：http://zope.psychologie.hu-berlin.de/profship/bio/staff/mit_anz_1-en?pid=4489.0、第53回研究会：感情喚起スライドに対する予期が主観的評価と心拍数に及ぼす影響、第52回研究会：「大学生の睡眠習慣と精神的健康との関連」、第51回研究会：一致

タイミング動作の制御について：fMRIによる関連脳部位の特定、およびベイズモデルによる展望、第50回研究会：Investigating familiar face recognition with SCR and ERPs、生理学的知見に基づいた生理反応の多変量解析、第49回研究会：情動の予期と刺激先行陰性電位（SPN, stimulus-preceding negativity）の関連について、第48回研究会：「脳内情報処理過程とERP—偏側性準備電位とエラー関連陰性電位の機能的意義—」、第47回研究会：内側前頭皮質のモニタリングと評価プロセス、第46回研究会：エラー関連陰性電位によるエラー検出機能の研究、第45回研究会：「快・不快感情の精神生理学」、第44回研究会、生体リズムとしての睡眠と覚醒について強度の異なる運動が感情と脳波の左右差に及ぼす効果。

なお、1988-1900年開催の第16回研究会からは演題のタイトルを、そして2005年に開催された第52回研究会から第71回研究会については、演題のサマリーを早稲田大学心理学会のホームページに掲載してきました。早稲田大学心理学会からは、当研究部会へのご支援をいただきました。深く感謝いたします。

また、「研究部会報告」は第71回研究会（2017年8月5日）までで、瓦版32号に掲載されています。

4. 20年続き、そして今後も続く「老年学研究部会」

立正大学心理学部教授 所 正文（一文・1981）

「21世紀には心理学は無くなり、生理学と社会学に分かれてしまう」。1980年当時、早心の学部学生であった私が、心理学史の授業で聞いた話である。驚くべき未来予測であったが、その根拠として次のような説明がなされると記憶している。

行動メカニズムを究明する基礎心理学はどんどん進化発展し、脳科学と一体化する。また、現実の問題解決を志向する臨床心理学（現在では「実践心理学」と呼ばれる場合もある）は、心理学が着目する小さな要因では問題解決には結びつかず、マクロ的要因の考慮が不可欠となる。すなわち、社会学と一体化する。それ故に、心理学は消えるという説明であった。

前者については、90年代以降、MRI画像などを提示した学会報告が増え、確かにその通りの展開になっている。後者については、学部卒業後に民間企業に就職しながら母校大学院で心理学を学び続けた私にとって、直ちに気づいた心理学の限界であった。現実社会の問題について心理学で説明できる部分は明らかに限られており、異分野の知識（特に社会科学分野）を学ぶことの重要性を強く感じた。

40年という長きにわたって私が心理学と関わり続ける中で、日本社会は超高齢社会へと大きく転換した。心理学を中核に据えて現実社会の問題に挑み続ける私は、必然的に高齢者心理学、生涯発達心理学という分野に辿り着いた。早心学会の重鎮である石井康

智先生から、この分野にいち早く取り組んでおられた谷口幸一先生を20年前にご紹介頂き、共に老年学研究部会を立ち上げることになった。

立ち上げた研究部会は少人数での運営が続き、この20年間、試行錯誤の連続であった。しかし、世界心理学史に名を刻む知見を残した学習心理学者・スキナー（Skinner, B.F.; 1904-1990年）の研究会はわずか数名で運営されたことを木村裕先生から教えて頂いた。木村先生は、私の学部卒論の指導教授であり、その後40年にわたり交流させて頂いている。このご教示が心の支えとなって、我々の研究部会が20年間続けられたように思える。

いささか手前味噌ではあるが、研究部会の足跡を通して、「実践心理学」の研究スタイルを作り上げることができたように思える。主なポイントとして3点あげられる。

(1) 理論と実践の橋渡しにチャレンジ

研究部会には、大学教員だけでなく、谷口幸一先生の勤務先である東海大学の社会人講座受講生や社会人大学院生を積極的に招き入れたことが第1の特色としてあげられる。この運営方針は、谷口先生の根幹となる考え方であった。

年配の社会人参加者からは、豊富な社会経験を披瀝して頂き、大変有益な情報が得られた。研究部会恒例の「温泉合宿研究会」は良き思い出である。創成期には私の前任校である国士舘大学・世田谷キャンパスを本研究部会の主会場としたが、最寄駅である松陰神社前駅には年配者向けの小料理屋があり、その場で2次会ではさらに活発な議論が展開された。

谷口先生の教え子である社会福祉士として活躍する女性福祉職2名（社会人経験を経て、東海大で修士取得）、私の教え子である臨床心理士・公認心理師として活躍する女性臨床家1名（国士舘大学卒業後、カナダへ渡航しサイモンフレーザー大学心理学部卒業、帰国後早大で修士取得）が、長きにわたって研究部会に参加し、充実した活動を展開することができた。

さらに、早心OBのひとりである中村誠氏の多大なる貢献が特筆される。中村氏は豊富な学識と社会経験、継続中である実母の介護経験を元に、毎回多彩な知見を提供して下さった。中村氏の尽力なくして本研究部会の継続はなかったと言っても過言ではない。

また、故人となられた折原茂樹先生（早心OBの国士舘大学教授）からも本研究部会には、大きなご助力を賜ったことを強調させていただきたい。

私が立正大学へ移籍した後は、所属学部が心理学部となったため、学部ゼミ学生および大学院生にも参加を求めた。彼らは21世紀後半の超高齢社会を生きる若者であるため、年配者から彼らに緩やかな示唆を与えることを目的としたが、残念ながらこちらの意図は十分には伝わらなかった。都会の若者には高齢社会への関心はいまひとつのようであった。老年学研究が若者に関心を持たれなかったことについては、大きな課題となってしまった。

実践心理学の基本的考え方の一つに「科学者-実践家モデル (scientist-practitioner model)」がある。基礎研究のみならず現実場面を重視する考え方である。実務経験豊かな社会人と共に研究部会を20年間運営してきた我々のスタイルは、まさにこの考え方に基づくモデルケースと言える。

(2) 研究成果発表の実践

研究部会での活動成果について、部会代表者である谷口先生と私が報告書作成、関連学会での報告、書籍刊行、およびマスメディアでの論説主張等を行ってきたことを強調したい。決してその場限りで終わることなく、活動成果を記録として残し、次に繋げていく努力を行ってきたことは、小さな研究部会としては誇れる活動であったと言える。

現実社会の問題解決に取り組む研究部会活動は、「科学者—実践家モデル」に基づく必要がある。そのためには、研究成果を発表し、記録にとどめておくことは最低限の義務であり、我々は地道な活動を継続したと自負できる。

(3) アプローチ方法としての「生物—心理—社会モデル」

人間の身体は、生物（医学）・心理・社会的な要素が相互作用するため、人間の不調や病気は、それぞれの側面における対処を試みるだけでなく、総合的なアプローチが必要になるという考え方が「生物—心理—社会モデル」である。元来は医療分野での考え方であるが、我々の研究部会では、結果的にこのモデルに沿って活動を進めていくことになった。すなわち、心理学を中核としながら、医学領域、社会科学領域（主に政策科学領域）を包含しながらアプローチを展開していった。

生物：医学的要因 (medical factors)

心理：臨床心理要因 (mental factors)

対人心理要因 (interpersonal factors)

社会：環境（自然・文化）要因 (environmental factors)

法律・経済による要因 (enforcement factors)

理由の一つとして、部会代表者の谷口先生が鹿児島大学で医学博士を取得し、さらに鹿屋体育大学、東海大学健康科学部で長く研究・教育に従事されたため、生物（医学）要因、臨床心理要因を重視して研究課題に取り組まれたことがあげられる。

一方、私は、物流企業のシンクタンクである日通総合研究所を経て、国土舘大学政経学部で研究・教育に長く従事したため、社会要因、および対人心理要因を重視して研究課題に取り組んだ。

2人の研究部会幹事のアプローチのわずかなズレが「異知の融合」を醸し出し、実践心理学の基本的考え方とされる「生物—心理—社会モデル」の形を作り出すことになった。

早心学会が閉じ、20年間続いた我々の老年学研究部会も終わろうとしている。しかし、中核メンバーは健在であり、今後も交流は続く。我々には実践心理学研究の形を築いたという自負がある。老年学研究部会は「人生100年時代」を見据えて、我々は今後も活動を継続するだろう。

5. 意識心理学研究部会の思い出

株式会社日通総合研究所 矢野裕之（一文・1986）

1. 意識心理学研究部会とは

意識心理学研究部会の「意識心理学」とは、戸川行男先生が提唱された意識心理学に由来します。そして、私が同部会に参加させていただくようになった時には、戸川先生のご指導を受けられた早稲田大学の岩下豊彦先生が幹事として主催されていました。

実際の研究活動は、この戸川行男先生の意識心理学に関連したテーマに限定されるものではなく、部会の会員自身それぞれが行っている研究活動の発表の場という性格が強いものでした。たとえば、この部会における私の発表は、自分の修士論文の内容の紹介でした。また、時には部会の会員に限らず、会員のネットワークで講師をお呼びして発表をお願いすることもありました。このような形で活動を行っていたため、発表内容の記録をみると、臨床あり、統計学あり、交通心理学ありと非常に多岐にわたるものとなっています。

私は、卒論、修論において、岩下豊彦先生（以下、「岩下先生」とさせていただきます）のご指導を受けたご縁で、修士課程に進学後に意識心理学部会に参加させていただくようになり、博士課程で岩下先生のゼミに入れていただいた頃から、幹事を岩下先生から引き継がせていただきました。ただ、私の至らなさで、その後5年程度で活動は休止状態となってしまい、活動を再開しようとしても果たせないままとなってしまいました。結局、かなりの年月が経過してから、最終的に部会は解散することとなり、私に幹事をまかせて下さった岩下先生には、本当に申し訳ないことをしてしまったと、取り返すことのできない日々を未だに悔やみ続けております。そのような私が、このような誌面をいただいて、部会の思い出を語って良いものか大いに疑問のあるところですが、自分なりに大昔の頼りない記憶をたどり、当時の活動を振り返らせていただければ幸いです。

2. 最初の大失敗

私が意識心理学研究会に参加させていただき、しばらくしてから、岩下先生に「早稲田心理学会の会報に部会の活動報告の原稿を提出してもらえないか。内容は、あなたが部会で最近発表した内容ではどうか」とのご指示をいただき、早速、自分の発表内容を要約して学会にご提出したことがありました。ただ、岩下先生はおそらく、簡潔・コン

パクトに整理したものをイメージされていたと思うのですが、私は、そのような岩下先生のご指示の趣旨を十分に理解できておらず、かなりボリュームのあるものを提出してしまったのです。このため、会報の編集において、多くの方に大変なご迷惑をおかけしてしまいました。今でも、もう少し別の対応をさせていただけなかったかと思いつつに後悔しています。

3. 部会での活動について

冒頭で申し上げた通り、部会での発表のテーマは、特に意識心理学との関係性に拘らず、部会の会員さらには招待講師の方達からの多岐にわたる内容となっていましたので、とても、私などが概括できるものではありません。そのため、私が幹事となって以降の大きなイベントとなった、早稲田心理学会の大会での発表に限定して整理させていただくことをご容赦いただければと思います。

ご存知の通り、1995年より3年間、早稲田心理学会の大会で意識心理学部会を含む各部会が広く会員に向けて発表することとなりました。それまで、部会での活動は、あくまで部会の会員を中心とした少人数での発表という形を取っていましたが、早稲田心理学会の会員の方に向けて広く、発表することとなり、私にとっては大きなプレッシャーとなりました。幸い、当時、早稲田大学商学部の鈴木宏昌先生の研究会に参加させていただき、この研究会で当時行っていた早稲田大学卒業生のキャリア調査の内容について、鈴木先生をはじめとする研究会の方達と「企業で働き続けるということー早大OB1236名の履歴書ー」というタイトルで共同発表させていただくことにしました。大会も卒業生の方達が多く訪れますので、比較的興味を持っていただけるのではと思ったのですが、幸い、多くの方に発表を聞きに来ていただき、私としては、なんとか無事に終わることができたのではと思っています。

また、その次の年は、私が修士課程で所属させていただいた浅井邦二先生（以下「浅井先生」とさせていただきます）のゼミの先輩であり、かつ、私の所属先の株式会社日通総合研究所の先輩である、立正大学教授の所 正文先生と共同で「経済行動における意識について」というテーマで発表させていただきました。その内容は、今でいう行動経済学のような、経済行動の分析における心理学的知見の活用の可能性について取り上げたものですが、この時は、部会の方以外に、企業人となった会員の方達が何人か来ていただき、浅井先生も聞きに来ていただきました。

このように、最初の2回の大会発表は、他の方の力をかなりお借りして終えることができたのですが、3回目の大会では、いよいよ自分だけで発表しなければならなくなりました。その時のテーマが「心理学における、正しい『エンジニアごっこ』のあり方について」というもので、かなり奇をてらった感が強いものになってしまっていたかもしれませぬ。その内容は、少なくとも私が大学院にいたころの心理学は、パソコンのスキルの高さ等、エンジニア的なスキルが重視される傾向が強いように思われ、そのことに

対して、何か問題提起をしようという、今さらながら大それたものでした。私自身は秋葉原にパソコンを触りに行ったのが中学生の時であり、パソコンをはじめとする理数系のスキルに対する興味そのものは元から強かったのですが、実は大学進学後に心理学科に入るまで、パソコンのスキルが心理学の世界で重視されているとは知らず、心理学会に入った後で、たまたま趣味と実益が一致したようなところがありました。ただ、それゆえに、もともとパソコンを心理学のツールとするために勉強していたわけではなかったことから感じていた違和感のようなものがあり、それに基づいた発表を何とか行いたいということが発表の動機になっていました。

この3回目の発表は、正直、それまでの2回に比べて、部会の方以外はほとんど聞きに来ていただけないという結果になりました。ただ、発表前に浅井先生がわざわざ会場に顔を出して下さり、「今日は他の部会をお聞きすると約束しているため、参加できないが、非常に面白いテーマだと思う。資料だけもらいたい」と言っていたのが非常に嬉しい思い出です（ただ、資料の内容そのものは、必ずしも先生の期待に沿えるものにはなっていたか自信は全くないのですが）。そして、この発表が実質的に意識心理学部会として最後の活動になってしまいました（その後、かなり経過してから、活動を再開しようと、会員の方達に開催案内と資料の郵送まで行ったことがあったのですが、会場の確保に不手際があり、急遽中止となってしまい、最後まで至らない幹事でした）。

ただ、今考えると、この最後のテーマでの発表を行えたのは、意識心理学部会だったからこそとも言えるかもしれません。繰り返しになりますが、意識心理学部会の発表テーマは、戸川行男先生の意識心理学に必ずしも拘ることなく、非常に多岐にわたっていました。ただ、意識心理学は当時の心理学に対して疑問を呈す性格を持っていたと私は理解しており、また、意識心理学部会での発表とそれに対する議論も、そのような姿勢で行われる傾向にあったかと思われ、それは、部会としての活動の根底にあるものだったと言えるかもしれません。そのような部会だからこそ、上記の発表も行うことができたのかと、この原稿を書きながら、改めて感じております。

4. おわりに

今回、意識心理学研究部会における思い出について記す場をいただき、記憶を整理しようとする、自分の失敗、不手際、至らなさといったものを改めて認識することになってしまったようです。そのような私にも発信の機会を与えてくださり、何より、多くの方の貴重な研究成果について直接お聞きできる貴重な場となったのが意識心理学研究部会でした。限られた年月でしたが、そのような場に参加できたことに、改めて感謝いたします。

「押山さん、お願いがあります」という、いつもの物腰の低い、恩師からの連絡に、「わたしでよろしければ」と言ってお引き受けしたのが、2014年の第一回目の教養講座となりました。6月、戸山キャンパスにて、障害児への音楽療法をテーマに、ワークショップを中心とした内容で、教養講座を行わせていただきました。参加者は30名程度、ワークショップを行うには最適の人数、いつもながらの理事の皆様の大なるサポートのおかげもあり、大好評にて（と本人は思っています。笑）執り行うことができました。参加者の皆様からの生の反応は、とてもいい勉強になりました。皆様には行動変容のために音楽を使うという視点に気づいていただくことが出来たように思います。その時から、教養講座に関して、理事の先生方と一緒に、計画し、可能な範囲でお手伝いさせていただくようになりました。様々な先生にお声掛けさせていただきました。筑波大学湯川進太郎先生、大正大学長谷川智子先生、福島医大の丹羽真一先生、千葉大学の山本利枝先生、大島郁葉先生、早稲田大学の岩田浩康先生、向後千春先生、そして、我々理事の中から小林源先生、ざっと上げただけでも、非常に多岐にわたる濃い内容でした。新聞による衆知から情報を得てこられる一般市民の方々からの反応も実に様々であったと思います。非常に豊かな知識を社会に還元出来たのではないかと思います。

教養講座の計画と実施をお手伝いさせていただくことは、私自身にとって、非常に有意義なことでもありました。心理学会を運営される理事の皆様との交流からも得るものがたくさんありました。私の思いになってしまうことをお許しただけならありがたいのですが、このような教養講座にピリオドが打たれてしまうことが、非常にもったいないように感じております。アカデミックな情報を、一般レベルで気軽に得る機会は、そんなに多くはありません。そして、教養講座を開かれる先生方も、一般の方にわかるように、講義をされます。先生方の科学的な裏付けのある知識は、講座に参加された方々自身の生活に、安心して取り入れられたことと想像します。昨今、危ない情報や、拡大解釈された情報、偏りのある情報などが多くみられますが、教養講座は、先生方が手塩にかけてこられた研究に関連した技術と結果が情報源となっています。そして、参加には何の壁もなく、無料でその情報を得ることが出来ます。何百人も参加する大きな、参加費用が高い講座ではないということも魅力のひとつだったように思います。

早稲田大学心理学会は、その歴史を閉じますが、これまで会を取り仕切り、教養講座を含めた様々なイベントを進めてこられた理事の先生方に、心から敬意を表します。最初に追お声掛けくださいました恩師の木村裕先生、いつ何時でも優しくフォローしてくださいました石井康智先生、本当にありがとうございました。学会の先輩・同輩・後輩のみなさま、お世話になりました。

1. 早稲田大学心理学会と私

小林 源（一文・1962）

かつて猛烈社員という四字言葉が世に精彩を放っていた。ある時、「早稲田大学の春木様という方からお電話です」との取り次ぎが、当時の私の職場にあった。

「はい、小林源です。ご無沙汰しています」

「小林…源さんか。元気かい。急な話だけどねえ、今度の早稲田大学心理学会でパネルディスカッションをすることになって、源さんにパネルメンバーの1人になってもらおうと思っただけの電話なんだけど、どうかな？」

冒頭の四字言葉を地でいっている私～例えば、未だ週休二日制が普遍化されていない頃の休日出勤（つまり一週間無休日）は日常茶飯、月間100時間残業もほぼ当然視されていた頃とあって～が、答えあぐねていると、

「早稲田の心理学専修卒で社会に出た人たちが、どんな風に活躍しているかを聞きたくて立てた企画で、リクルートの山下潤三君からは、すでに出席の内諾を得ている…」

と、ここまで聞いて、他社に行った人たちの情報が得られる、悩みも聞ける、成功体験など知りえたらもっといい、などと参加することへの前向きな考えが次々と浮かび、結局、

「伺います。ご期待に副えるかどうかは分かりませんが」

となってパネラーとなった。パネラー3人のうちのあとの1人は、どうしても思い出せない。

要は、私が早稲田大学心理学会と縁ができたのは、この“春木コール”であったのです。

理事の末席を汚すようになった上、何かのハズミで副会長にされた?!ものの、まるで役立たず、これを自覚していたため、木村前会長、石井現会長にこの旨と辞任の申し出をしたものの、一笑に付され、諦めた。が、少し考えれば、私が不適任で辞めたとなれば、私を副会長に祭り上げた?!側にも責任があることとなるわけで、いい歳をしての愚行に忸怩したことをうっすらと思い出したりもする。

悲しい話に変わるが、その春木先生は今春天寿を全うし天に召された。仏教に造詣が深く、時には参禅もされていた同先生が、昨年キリスト教に帰依し、受洗もされ、帰らぬ人となられたお心の軌跡には、遠く思い及ぶべくもないが、早稲田大学心理学会の閉会と春木先生の天への旅立ちがほぼ同時期であったことに、私は深い感慨に浸らざるを得ない。私の早稲田大学心理学会の会員としての歩みは、春木さんに始まり春木先生で終わったわけだから。

◎書くほどに かく恥が増え 擱筆す

源

2. 三島二郎先生直筆講義ノート

吉川政夫（教育・1973）

私は、早稲田大学教育学部教育学科教育心理学専修に、1969年（昭和44年）に入学し1973年（昭和48年）に卒業しました。その後、同大学大学院文学研究科心理学専攻修士課程・博士課程で学びました。

学部では、三島二郎先生、服部清先生、牧野達郎先生、橋本仁司先生、富田達郎先生、森川靖夫先生、東清和先生、浅井邦二先生、戸川行男先生に、大学院では三島二郎先生、本明寛先生、その他の先生方に教育研究でお世話になりました。

多くの先生方から教えを受けましたが、本稿では、学部と大学院の研究指導教員として、またその後教員となってからもご指導いただいた三島二郎先生の直筆講義ノートについて書かせていただきます。

先生は、1919年長崎市出身、1942年早稲田大学文学部哲学科心理学専攻卒業、1947年活水女子専門学校教授、1949年早稲田大学文学部講師、1958年同大学文学部教授、1959年同大学教育学部教授、1962年文学博士、1990年早稲田大学定年退職、そして2008年に亡くられました。

2009年11月に教え子が集まり、奥様とご子息をお迎えして「三島先生を偲ぶ会」を大隈会館で開きました。その後、ご遺族から生前の講義ノート等の資料が託され、折原茂樹先生が国士舘大学の研究室に保管され、整理とPDFファイル化をされました。教え子の平岡幸雄先生もご尽力されました。その折原先生は在職中の2014年に62歳で亡くられました。以下で直筆講義ノート等について紹介できるのはご遺族と折原先生、平岡先生のお陰です。

在職中に執筆された講義ノートは133冊です。心理学21冊（1950年～1958年）、心理学概論14冊（1962年～1988年）、教育心理学25冊（1949年～1975年）、教育心理学原論18冊（1964年～1989年）、発達心理学14冊（1960年～1988年）、大学院講義・大学院演習23冊（1973年～1989年）、その他18冊（1950年代、1960年代）です。いずれも市販の横書き細



資料1 教育心理学原論1989年講義ノート最初のページ

罫線のノートに、鉛筆を使い先生独特の律儀な文字でびっしりと書かれています（資料1）。いずれのノートも分量は100ページから200ページです。

ノートを執筆された年代から先生の担当科目の変遷がうかがえます。個人的には、教育心理学原論と発達心理学の講義が印象深いです。先生がノートを読み話される内容を、受講生は必死にノートに書き留めました。「教育は受け取られた限りのものである」という含蓄のある言葉は忘れられません。

大学院の講義ノートの一例として、1989年のノートでは、「神人と賢人」(カントとその哲学についての紹介と考察)、「生涯発達の行く手—完態」(生涯にわたる精神発達の究極の到達点である完態の設定の必要性から、それを精神健康者といわれる人格に求め、マズロー、ロジャーズ、ユングの論を検討考察)などの主題が丁寧に深く論じられて

います。

1990年1月20日に大隈小講堂で行われた最終講義ノート最終ページの、すなわち講義を終えるにあたり原文を紹介すると次の通りです。

省みれば、昭和15年切羽詰まって始まった歩行速度の研究から精神テンポへの過程は全く実験心理学の、したがって物理科学的研究に終始していたものであり、第2には生態学的、生物科学的な地域差研究に進み、第3には生物社会科学的な乳幼児研究、発達障害の研究、第4には高年発達の研究に精神テンポから得られた普遍原理を応用し、第5番目に人格発達階層の仮説を得るという人文科学研究、最後にこの仮説の検証の意味を含んで、個性原理追求としてのcounselingの提起と進んできた所で今日の定年に至ったというわけであります。

そのことにおいて私のこのささやかな研究といえどもそのすべては疑いなく早大の恩師・先輩の御指導と多くの同僚教職員の方々の御援助と文心、教心の学生のご協力なしにはあり得なかったことから、ここに早稲田大学の学恩に対して尽きぬ感謝の気持ちをもつものであります。

それとともに何よりも本日の、私のつたない講義を最後まで我慢強く御清聴を賜りました皆様に対し特に心よりのお礼を申し上げる次第であります。

私にとりまして矢張り忘れ難い早大での大切な思い出となることは間違いないことですから、最後になりましたが、唯今のこの会を準備、設営して下さった教育学部、大学教務部、学生部ならびに早大教育学会、教育心理学教室の方々に厚くお礼申し上げて最終講義の結びとしたいと思います。

本日は誠に有難うございました。

最終講義はノート22ページを1時間40分で行うことがノートにメモ書きされています。講義の最終においてご自身の研究生活を簡潔に振り返っておられるのが興味深いです。

70歳で定年退職された後も先生はノートを執筆し続けられました。1990年から2004年までの間に136篇を書かれました。資料を読むために中野区の図書館に通い詰めたと先生ご自身から伺っています。それらは各種の研修会や研究会、大学や研究所、三島先生を囲む会等でお話しされました。通称、三島ノートと呼ばれてきた直筆ノート原稿のテーマは、日本思想、仏教思想、古代中国思想、古代インド思想、キリスト教思想、イスラム教思想、近現代西欧思想、人間実現への道やシニアライフ等の人間学など多岐にわたっています。

以上が三島二郎先生直筆講義ノートについてです。

先生と学生、教え子との交流については、早稲田大学在任中、教育心理学研究会（通称、教心研）の会長を長く務められました。教心研の夏合宿と春合宿には、駄菓子詰めた段ボール箱を持参され、講演をされました（写真資料）。私も1977年の長野県白馬



1986年教え子との研修会（水上温泉）



1986年教心研夏合宿（苗場）

村から1986年の新潟県苗場の合宿に車の運転手としてお供しました。

また、定年退職後の1995年から2004年まで毎年、教え子有志により催された「三島先生を囲む会」で2時間を超える講演をしていただきました。

やはり、どのような場合でも、講演をなさるときには直筆ノートを持参され、それを読みながら話を進められました。その姿勢は最後まで続けられました。

先生はすべての人に対して分け隔てなく「さん付け」で呼ばれていました。いつも帽子をかぶって外出されました。背広は茶系でした。歩行はかなりの速さでした。食には淡泊でした。お好きな食べ物はコーヒーとトーストでした。旅もお好きでした。

先生の生き方と生活スタイルは哲学者のカントのようでした。他者や世界に対して開かれていましたが、真理の探究や学問に対して真摯かつ律儀で持続性が強固でした。まさに学者と呼ぶにふさわしい先生でした。

3. 臨床教育と早稲田大学心理学会

柴田良一（一文・1973）

私が入学した年は大隈講堂が占拠された昭和44年で、入学後間もなく構内がロックアウトされ授業が翌年までないという学生運動が盛んな頃でした。そのためか学会も活動を休止していたようで、私自身も後年まで承知していませんでした。その後の学会の再発足時の第一号会報では活動休止の事情はあまり書かれてはいませんが、当時の学内事情と深い関係があったのではないかと推察しています。

私が学会と始めて関わったのは、足立区で教育相談をしていた時に石井先生から会報に載せるから職場紹介を書くようにと言われた時でした。昭和60年にデンマーク留学から帰国し常勤の心理職として、いじめ、不登校対策、そして女子高生コンクリート殺人事件の対応に奔走していた平成元年の暮だったように記憶しています。

その後、臨床現場から大学に移り、岡山の大学にいた際に、同期の市原君から学会の仕事を手伝ってくれないかと言われ、今日まで関わることになりました。当時はすぐ2、3年で終わるだろうと軽く考えていたのですが、結果として20年以上関わりクロージングまで関わることになったのですが、会員数の減少に歯止めをかけることができず歴史ある学会を閉鎖することは誠に残念ですが、果たすべき役目が終わったのではないかと今は考えています。

私は臨床を専門としてきたのですが、在学中は臨床をやっているのは「飯は食えない」と周りからよく言われたものです。臨床は文献を読み、勉強しても、実際に現場でクライアントに接しないとよく理解できないところが多いと考えています。場合によってはミスや勘違いを起こしてしまうと考えています。しかし今までは学生が臨床に触れる機会は少ないのが実情でした。学会が果たしてきた役割のひとつに、卒業生が学生に現場の様子を生で伝えるということがあったと考えていますが、これは臨床を志す学生にとっては貴重な機会になったのではないかと考えています。しかし臨床心理士も社会に周知され、国家資格もスタートし、臨床教育も整備された今はその役割は終えても良いかもしれないと考えています。